



【令和8年度重点目標】

自ら学びを創り出す子どもの育成 ～チャレンジ！自分でみつけて、自分でつくる～

このところ、本格的な雨が続きました。寺内ダムの貯水率は、6月末にはすでにほぼ100%です。渇水の心配はなくなりそうです。しかし、連日大雨が降った7月5日の正午現在、江川ダムは76%、小石原川ダムは51%と意外な数字でした。この数字に、なぜ?と疑問を感じ、理由を考えたり、調べてみたりしてくれる子どもがいると嬉しいな…と夢見る篠原です。

●資源回収 ～子どもたちのために役立てさせていただきます～

6月7日、資源回収を行いました。直前まで実施か延期かを迷う天気でしたが、登録していただいたサポーターの方と本部役員、教職員で、搬入いただいた物資の受け取りを行いました。資源物の提供にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。サポーターと役員の皆様にも感謝申し上げます。天気のせい、広報が弱かったせい、搬入車両は多くありませんでしたので、次回はもっとしっかりとPRを行いたいと思います。ただ、雨上がりの涼しい朝、サポーターさん同士や本部役員さんとサポーターさんとの会話が弾んでいて、それはそれでよかったかも…と前向きに捉えています。ただ、次回は、子どもたちのためにへとへとになるまで働きたいと思いますので、多くの方のご協力、ご来校をお待ちしております。次回は11月8日の予定です。



●GIGA スクール甲子園 ～自分で決めて、自分でつくった学び～

6月18日、三輪中学校でGIGAスクール甲子園が行われました。これは、筑前町教育委員会が主催し、町内の各小中学校から代表のクラスずつが三輪中学校に集まり、そこで公開授業を行って、全教職員での研修会を行うというものです。昨年度から始まったこの取組、「タブレット端末を中心としたICTの効果的活用」という必須のミッションがありますが、本校からは2年1組が出場し、生活科「2の1バイオパークをつくろう」の学習を公開しました。昨年度の開催を含め、3年生以下が公開授業を行った唯一の授業となりました。

さて、当日の子どもたち、小2には大きすぎる中学生の席に着く姿はとても微笑ましかったのですが、たくさんの参観者、中学校の教室で授業を受けるという非日常にも臆することなく、持ち前の好奇心や探究心をもって、生き生きと学ぶ…そんないつもの姿を見せてくれて、つくづく感心させられました。今回の授業、一番評価されたのは、子どもたちがこの学習のゴールを明確にイメージし、その実現のために、自分で解決方法を決めて(選んで)、自分の学びをつくっていったところです。まさに本校の今年度の重点目標につながっていく姿でした。

このような学びを目指し、中牟田小学校の教職員は、知恵を出し合いながら授業づくりを行っています。これからも知識・技能といった基礎・基本も大切にしながら、子どもの主体的な学びを追求していきます。



●学校運営協議会 ～力を合わせて子どもたちを育てる～

6月26日、学校運営協議会を行いました。学校運営協議会は、平たくいうと「学校・家庭・地域が力を合わせて子どもたちを育てる」ための架け橋となる集まりで、本校では、学校長、地域住民代表、保護者代表、行政(教育課、生涯学習課)の10名のメンバーで構成されています。

今回は、前回話し合った、本校の子どもたちの「よさ」と「今後への期待」から考えた「取り組んでみたいこと」を整理し、実際にどんなことを行っていくか「熟議」していきました。「子どもたちの素敵な姿、『あいさつ』を中心に、子どもたちをたくさん褒める取組ができないかな…」という話をしたところです。それぞれお仕事をもちながら、熱い思いに支えられボランティアで集まってくださっている方々ですので、できることには限度があります。PTAと同じで無理は続きません。少しずつ前進していきたいと思えます。PTAの佐多会長もメンバーに入ってくださっていますので、家庭への協力のお願いがあったときには、お力添えいただけると幸いです。



●田植え ～食に感謝、関係する全ての人・もの・ことに感謝～



7月3日、延期となっていた5年生の田植えを行いました。ご指導いただいている吉郷さんを中心とする方々の力強いご支援によって実現している貴重な「本物体験」です。

いざ、きれいに代掻きがなされた水田に……。はじめは恐る恐る足を踏み入っていた子どもたちでしたが、次第に「気持ちよくなってきた～」と尻餅をついたり、くだけた正座のようなかっこうで土の感触を味わったりする子も……。

なんだかんだありながら、1時間半かからないくらいで、約6畝（約20M×30M）の広さを植えきることができました。「なかなかまっすぐに並んでいる」とお褒めの言葉もいただきました。プール北駐車場の突き当たりの田んぼです。来られた際には、是非ご覧ください。

さて、こうして食料生産の一端に触れる経験を通して、子どもたちに気づかせること、感じさせることは何でしょう。まずは、シンプルに、土の感触、匂い、そこにいる様々な生き物の存在、労働による疲労感……、そして自然の恵みへの気づき、食べ物への感謝、生産、流通、調理に携わる人々がいることへの気づきと感謝、労働の尊さ、協働することの意義……。この1回の経験で全てに意識がいくことはないでしょう。しかし、長い人生をかけて、様々な経験がつながり、様々な価値感が自分の中で統合されていくための貴重な体験となることを期待しています。今回の田植えに限らず、子どもたちが様々な体験を通して何を感じているのか……言葉にすることはなかなか難しいことかもしれませんが、是非お子様との会話の中で引き出してあげてください。



田植えにかかわっての農家の悩み……ご家庭でも話してあげてください

田植えが終わったこの季節、学校に寄せられることが多い苦情について、ここに書かせていただきます。ちなみに、今年は今のところお叱りの電話は受けていませんので、今のうちに、ご家庭でもお子様と話をしていただけますと大変有り難く思います。

苦情の内容というのは、水田に隣接する水路や畦（あぜ）に関することで、「**子どもが水を止める板をさわったり、外したり、流したりして困る**」「**子どもが畦を歩いて崩すので困る**」というものです。

子どもにとって、水を止める板は、小さなダムのように魅力的なものなのでしょう。田んぼを区切る細い畦も、きつとちょっとした冒険心をかき立てられる、歩いてみたい場所であるに違いありません。しかし、この二つ、米作りにとっては、非常に大事なもののなのです。実は私も少しばかり米をつくっています。父が元気な頃は、仕事の一部を手伝うくらいで、細かいことはよく分かっていなかったのですが、父の衰えが進み始めて作業全般を引き継ぎ、稲作の全体像が見えてきてからは、こうした苦情を聞くと、農家の方の悲痛な叫びに共感せずにはいられません。

田植えが終わると稲作農家の一番の仕事は、水の管理です。米作りに水が必要なのはご存じのことだと思いますが、実は、ためる水の深さには、大きな意味があります。それは、水田にいるジャンボタニシと深く関係しています。水田にいるタニシは、幼い稲が大好物です。ですが、水深が、1～2cm以下であれば、あまり稲を食べることができません。ところが、水深が深くなると、よってたかって苗にとりつき、あっという間に食べてしまうのです。一本ずつまるごと食べてくれれば被害はそう深刻にもならないのですが、タニシは水面あたりの茎の部分を食べます。そしてそこで苗がちぎれると、そこより上の葉は、水に浮かんで漂い、あろうことかタニシは、別の苗にとりついて同じことを繰り返すのです。水田の中に、ミステリーサークルのように苗がない部分ができているのをご覧になったことはありませんか？それは、深いところの苗が食べられるからなのです。それならばとタニシを恐れて水を浅くしすぎると、水面から土が出ているところに草が生えてしまいます。これはこれで後々途方に暮れる状態になります……。田植えの後の2～3週間、私としては、1cm単位、できることなら5mm単位で水の管理をしたいというくらい気持ちがあります。田植え前の代掻きという作業がありますが、水深を均一に保つためにできるだけ真っ平らにしようがんばるのですが、これはなかなか難しい。そこで、水を出し入れする板の高さを微調整して対応するのです。ですから、「さわったけど、また元に戻したからいいでしょ？」とは決してならないわけです。

米作りは本当に大変なのです。どうか、子どもたちに農家の皆様の思いを届けてください。どうぞよろしくお願いいたします。長々と失礼いたしました。お付き合いいただいた皆様、ありがとうございました。